

# 2026年産「アルプス米」てんたかく・てんこもり栽培こよみ (JA米)

アルプス農業協同組合  
アルプス農協管内農業技術者協議会

## てんたかく

収量構成の目安 (600kg/10a)

収量構成	目安	収量構成	目安	収量構成	目安
㎡当たり穂数(本)	500	㎡当たり籾数(粒)	30,000	玄米千粒重(g)	23.5
一穂籾数(粒)	60	登熟歩合(%)	85		

4月
5月
6月
7月
8月
9月

育苗期
5/6 田植え
活着期
有効分けつ期
無効分けつ期
6/25 幼穂形成期
穂ばらみ期
7/17
登熟期
8/21
成熟期

5/6 田植えの場合
浸種 3/30
播種 4/12
搬出 4/15
5/6 田植え
5/23-25 除草剤散布
5/23-25 軽い田干し
5/30-6/4 溝掘り
5/30-6/4 中干し
6/20頃 加里散布
6/25 穂肥①
7/5 穂肥②
7/17 出穂期
8/14-16 落水
8/21 刈取り

### 作業日程の目安

### 管理のポイント

- 土づくり**
  - 稲わらの腐熟促進のため、秋耕しを行い、排水溝を掘る。
  - 土づくり資材や堆肥を施用する。
- 耕起・代かき**
  - 代かきは、均平に努め、練りすぎに注意する。
  - ゆっくりと耕起し、作土深を15cm以上確保する。
- 田植え**
  - 搬出直後からは、換気を徹底する。
  - 田植時期に応じた計画的な育苗を行う。
- 健苗育成**
  - 水は、均平に努め、練りすぎに注意する。
  - 代かきは、均平に努め、練りすぎに注意する。
  - ゆっくりと耕起し、作土深を15cm以上確保する。
- 溝掘りは確実に**
  - 活着後は、浅水管理をする。
  - 植付深さは3cm。
  - 植付本数は株当たり3〜4本。
  - 栽植密度は坪当たり70株を確保する。
  - 苗箱施肥による防除を実施する。
  - 基肥は基準量を施用する。
- 中干しは適期に開始**
  - 5mに一本を目安に溝を掘る。
  - 6/20頃に「エスアイ加里」または「珪酸加里」を施用する。
  - 強すぎる中干しに注意する。
  - 田植後4週間までに遅れずに開始する。
- 中干し後は幼穂形成期まで間断かん水**
  - 幼穂形成期から飽水管理
  - 1回目穂肥は幼穂長1〜2mmと葉色を確認してから施用する。
- 草刈りの徹底**
  - 7月上旬までに畦畔や雑草地の草刈りを終える。
  - 葉色が淡い場合は、出穂前に追加穂肥を施用する。
  - 2回目穂肥は1回目穂肥から10日後を目安に施用する。
  - 1回目穂肥は幼穂長1〜2mmと葉色を確認してから施用する。
- 出穂後20日間の湛水管理**
  - 生育ステージに合わせて防除を実施する。
  - 基本防除3回の徹底
    - 1回目は出穂期
    - 2回目は穂揃期
    - 3回目は傾穂期
- 適期収穫**
  - フーン時はあらかじめ入水する。
  - 刈取り予定日の5〜7日前まで間断かん水を行う。
  - 1.9mmのふるい目を使用し、選別を徹底する。
  - 水分14.5〜15.0%に仕上げる。
- 適正な乾燥調製**
  - 胴割れ防止のため90%までに刈り終える。
  - 籾黄比率80%で刈り取りを開始する。

### 品質向上は「土づくり」から

資材名	標準施用量(kg/10a)
粒状ケイカル	200
アサヒニューテツ	100
シリカロマン	100
シンキョーライトP	100

● 秋耕しの実施  
稲わらは秋のうちに5〜10cm程度浅めにすき込む

### 適期の中干し開始・適度な中干し実施

- 中干しは田植後4週間までに遅れず開始することで根の伸長を促進します。
- 中干しの効果を高めるため、中干しの前には溝掘りを確実に実施しましょう。



### 防除の徹底で被害を防止!!

- 防除は適期に行い、防除間隔は7日間を目安とする(10日以上あけない)。
- 畦畔等のイネ科雑草の穂が出る前までに草刈りを行う。○ 麦あと等の不作付地は、大豆、園芸作物、緑肥等の栽培を行う。

#### 病害虫防除体系

【育苗基本防除】・苗箱施肥薬は、規定の薬量(50g/箱)を厳守し、箱全体に均一に散布する。

薬剤名	散布量	使用時期	対象病害虫
ブーンレバード箱粒剤	50g/箱 (原薬1kg/10a)	播種時(覆土前)〜移植当日	いもち病、紋枯病、イネミスゾウムシ、イネドロオウムシ、白葉枯病、もみぢ細菌病、ツマグロヨコバイ、フタオビコヤガ、ニカメイチュウ、イネツトムシ

【本田基本防除】・粉剤、液剤体系 ・てんたかくは出穂期防除必須

防除時期	基本防除				随時防除
	出穂期	穂揃期	傾穂期	傾穂期後	随時防除
粉剤	バリダシン粉剤 DL 3〜4kg/10a	ビームコンカトスタークルF粉剤 5DL 4kg/10a	ラプサイドキラップ粉剤 DL 4kg/10a	スタークル粉剤 DL 3kg/10a	トレボン粉剤 DL 3〜4kg/10a
液剤(通常散布)	バリダシン液剤 5 150L/10a 1,000倍	モンカトフロアブル+スタークル液剤 10 150L/10a 1,000倍	ラプサイドK2フロアブル 150L/10a 1,000倍	スタークル液剤 10 150L/10a 1,000倍	トレボン乳剤 150L/10a 2,000倍
液剤(空中散布)	バリダシンエア 0.8L/10a 8倍	モンカトフロアブル+スタークル液剤 10 0.8L/10a 8倍	ラプサイドK2フロアブル 0.8L/10a 8倍	スタークル液剤 10 0.8L/10a 8倍	トレボンエア 0.8L/10a 8倍
対象病害虫	紋枯病	紋枯病、いもち病(粉剤)、カメムシ類、ウンカ類、ツマグロヨコバイ等	いもち病、カメムシ類、ウンカ類(粉剤)	カメムシ類、ウンカ類、ツマグロヨコバイ等(通常)	カメムシ類

### 除草剤散布は遅れずに

#### 雑草防除体系

● 水深5cm程度を保ち散布する。● 除草剤散布後7日間は落水やかけ流しをしない。

#### 一発処理 雑草の発生が少ない圃場

- 「カクシン1キログラム」[案粒] ノビエに長く効く
- 「クサウェポン1キログラム」[ジャンボ] コナギ、ホタルイに高い効果
- 「ベッカク1キログラム」[豆つぶ250][ジャンボ] ノビエに安定した効果と長期間効果

#### 雑草が残った場合

- 「クリンチャー」[ジャンボ] ノビエ4葉期
- 「トドメMF」1キログラム ノビエ4〜5葉期

#### 体系処理 雑草の発生が多い圃場

- 体系①(ノビエ対策)
  - 「マーシェット1キログラム」 移植後3〜5日に使用
  - 「ベッカク1キログラム」[豆つぶ250][ジャンボ] マーシェット散布後7〜10日に使用
  - 「ウィードコア1キログラム」[ジャンボSD] 中干し後に使用
- 体系②(ホタルイ対策)
  - 「ピラクロン1キログラム」 田植同時使用
  - 「クサウェポン1キログラム」[ジャンボ] 移植後10日に使用
- 体系③(中期剤タイプ)
  - 「ピラクロン1キログラム」 田植同時使用
  - 「ウィードコア1キログラム」[ジャンボSD] 移植後15〜20日に使用
  - 「テックン1キログラム」[ジャンボSD] 移植後15〜20日に使用

#### 広葉雑草が残った場合

- 「バサラン粒剤」 落水散布
- 「ノビエ、広葉雑草が残った場合」
- 「クサナムが発生した場合」
- 「トドメバスMF液剤」
- 「ロイヤル」乳剤

### 土壌に応じた適正な施肥量

土壌区分	てんたかく 施肥基準(5/6植え)			てんこもり 施肥基準(5/8植え)		
	基肥一発体系	基肥	穂肥	基肥一発体系	基肥	穂肥
砂壌土	40	40	10 13	45	45	13 13
半潤田	35	35	10 12	40	40	10 12
粘質土	30	30	10 10	35	35	10 10

- てんたかく・てんこもりは、適正な生育量を確保するために、基肥は基準とする量を施用する。
- てんたかくは、基肥一発の場合、追加穂肥を原則施用しない。

## てんこもり

収量構成の目安 (600kg/10a)

収量構成	目安	収量構成	目安	収量構成	目安
㎡当たり穂数(本)	450	㎡当たり籾数(粒)	31,000	玄米千粒重(g)	22.5
一穂籾数(粒)	70	登熟歩合(%)	85		

4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月

育苗期
5/8 田植え
活着期
有効分けつ期
無効分けつ期
7/12 幼穂形成期
穂ばらみ期
8/3
登熟期
9/19
成熟期

5/8 田植えの場合
浸種 4/3
播種 4/15
搬出 4/18
5/8 田植え
5/29-31 除草剤散布
5/29-31 軽い田干し
6/5-10 溝掘り
6/5-10 中干し
6/20頃 加里散布
7月上旬 一斉草刈り
7/11 穂肥①
7/21 穂肥②
8/3 出穂期
8/3 防除①
8/3 防除②
9/12-14 落水
9/19 刈取り

### 作業日程の目安

### 管理のポイント

- 土づくり**
  - 稲わらの腐熟促進のため、秋耕しを行い、排水溝を掘る。
  - 土づくり資材や堆肥を施用する。
- 耕起・代かき**
  - 代かきは、均平に努め、練りすぎに注意する。
  - ゆっくりと耕起し、作土深を15cm以上確保する。
- 田植え**
  - 搬出直後からは、換気を徹底する。
  - 田植時期に応じた計画的な育苗を行う。
- 健苗育成**
  - 水は、均平に努め、練りすぎに注意する。
  - 代かきは、均平に努め、練りすぎに注意する。
  - ゆっくりと耕起し、作土深を15cm以上確保する。
- 溝掘りは確実に**
  - 活着後は、浅水管理をする。
  - 植付深さは3cm。
  - 植付本数は株当たり3〜4本。
  - 栽植密度は坪当たり70株を確保する。
  - 苗箱施肥による防除を実施する。
  - 基肥は基準量を施用する。
- 中干しは適期に開始**
  - 5mに一本を目安に溝を掘る。
  - 6/20頃に「エスアイ加里」または「珪酸加里」を施用する。
  - 強すぎる中干しに注意する。
  - 田植後4週間までに遅れずに開始する。
- 中干し後は幼穂形成期まで間断かん水**
  - 幼穂形成期から飽水管理
  - 1回目穂肥は幼穂長1〜2mmと葉色を確認してから施用する。
- 草刈りの徹底**
  - 7月上旬までに畦畔や雑草地の草刈りを終える。
  - 葉色が淡い場合は、出穂前に追加穂肥を施用する。
  - 2回目穂肥は1回目穂肥から10日後を目安に施用する。
  - 1回目穂肥は幼穂長1〜2mmと葉色を確認してから施用する。
- 出穂後20日間の湛水管理**
  - 生育ステージに合わせて防除を実施する。
  - 基本防除2回の徹底
    - 1回目は出穂期
    - 2回目は穂揃期
- 適期収穫**
  - フーン時はあらかじめ入水する。
  - 刈取り予定日の5〜7日前まで間断かん水を行う。
  - 1.9mmのふるい目を使用し、選別を徹底する。
  - 水分14.5〜15.0%に仕上げる。
- 適正な乾燥調製**
  - 籾黄比率85〜90%程度で適期に刈り取る。

### 品質向上は「土づくり」から

資材名	標準施用量(kg/10a)
粒状ケイカル	200
アサヒニューテツ	100
シリカロマン	100
シンキョーライトP	100

● 秋耕しの実施  
稲わらは秋のうちに5〜10cm程度浅めにすき込む

◎ 積極的に利用しましょう!  
高品位・低コスト生産にカントリーエレベーターを